

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

三年間のRCC研究活動を振り返って

キリスト教と文化研究センター長 神田 健次



この三年間、室長会及び共同研究のメンバーの方々はじめ、多くの方々のお支えとご協力によりセンター長としての役割を遂行することができ、心より感謝申し上げます。

キリスト教と文化研究センター（RCC）は、二〇〇九年に『キリスト教平和学事典』（教文館）を刊行したが、二〇一〇年度以降のRCCの諸活動の大きな主題は、事典作成で取り組まれたキリスト教平和学を新たに展開することにあつたと言える。そのような大きな主題の下で、多彩な研究会、フォーラム、講演会などが活発に開催されてきた。

RCCの基軸としてすえられたのは、何よりも研究プロジェクト

クトであり、3年間一貫して推進されてきたのは、「ミナト神戸に宗教多元主義を探る―海シルクロードVの文化と宗教的共生」、及び「キリスト教主義教育の現在」（二〇一一年度以降は「キリスト教主義教育の展開」、「共同研究報告」参照）であった。

主要な研究プロジェクト「ミナト神戸に宗教的多元主義を探る」の成果は、「共同研究報告」でも記載されているように、この三月に神戸新聞総合出版センターの定評ある「のじぎく文庫」のシリーズとして、『ミナト神戸の宗教とコミュニケーション』というタイトルで出版された。しかも、この研究成果は、二〇一三年度の秋学期に大学の総合コースにおいて教育にも還元される予定である。

その他の研究プロジェクトとして、二〇一〇年度でそれまで継続してきた共同研究「聖典と今日の課題」が一応の終結をして、その成果は『聖典と現代の諸問題―聖典の現代的解釈と提

言』(二〇一一年 キリスト新聞社)としてまとめられ、刊行された。そして、二〇一一年度より「自然の問題と聖典」という新たな共同研究のプロジェクトが二年間にわたって展開され、その成果をあげてきている。また二〇一〇年度だけの共同研究「文化/社会抵抗における原動力としての聖書受容の諸相」も実施され、研究成果が報告されている(『紀要』一三号を参照)。

以上のような三年間の共同研究のプロジェクトが、それぞれの研究課題を地道に取り組むことによつて、独自の研究成果を具体的に創出し、学内外に多少なりとも発信することができたことは、研究センターとしての本来的な役割を果たすことができたとと言えるであろう。

また、公開講演会あるいはミニ・フォーラムにおいても、二〇一一年度にはチュニジア出身のオムリ・ブージッド氏による「チュニジアとジャスミン革命」、フォット・ジャンナリストの桃井和馬氏「宗教は戦争の原因か?」という題目で、世界の情勢を視野に講演をしていた。さらに、二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災

の出来事については、かつて阪神・淡路大震災を経験した大学の研究機関として真摯に受け止めたいと話し合われ、研究プロジェクトや公開講演会に反映されてきたと言える。公開講演としては、これまでのNews Letterで内容の要約を掲載してきたように、二〇一一年度のW.リーネマン客員教授「原子力エネルギーと被造物への責任―キリスト教神学の立場から」(神学部と共催)、二〇一二年度には被災地の視座から、畠山重篤氏「森は海の恋人―人の心に木を植える―」や山浦玄嗣氏「日本人の心に届く『ことば』を求めて―津波を越えて、闇から光へ―」などの公開講演会を開催した。あるいは、共同研究の「ミナト神戸に宗教多元主義を探る」及び「自然の問題と聖典」にも、キリスト教平和学の重要な課題として反映されているのである。

キリスト教平和学を主軸とする新たな研究プロジェクトが、新年度からの新たな研究体制のもとで始動することになる。それぞれの研究プロジェクトが、より一層充実したものとして推進されることを期待し、RCCの更なる発展を願ってやまない。

RCC主催講演会(抄)

二〇一二年十一月十九日

日本人の心に届く「ことば」を求めて
—津波を越えて、闇から光へ—

山浦玄嗣氏

一・なぜ善良な人が苦しむのか。

二〇一一年三月一日に未曾有の地震と津波を経験いたしました。その後、たくさんの新聞記者が気仙にインタビュに来ました。彼らは口をそろえて、「東北の人間は誠に我慢強い。そして黙々として耐えている。この我慢強さは全く驚くべきものだ。そしてまた東北の人間は実直で正直である。だけどこんな善良な人がなぜこんなむごたらしい目に遭わなければならないのか。あなたは信仰者としてどう思いますか」と言うのです。私はそんなことも夢にも考えたことがなかったのですが、答えようがなかった。やがてだんだん腹が立つてきました。気仙の人間のあいだで、「なしてこんな目に遭わねアばなんねアんだべ」という言葉を聞いたことがありません。なぜそういう馬鹿なことを聞くのだろうか。我々は一度もそんなことを考えたことがない。津波でたたくさんの人が死ぬのは悲しい。悲しいけれども、人はみんな死ぬようにできている。私の友人たちも、「東京から来る新聞記者はみんな同じようなことを言うんだ。なしてだべな。おらアそんななこと考えたこともねアがな」と言つて、みんな怒っていました。

二・人は何のために生きているのか。

しかし、このことによつて人間は何のために生きているのかというのを深く考えさせられました。考えてみると、これは簡単なことなのです。人間は幸せになるために生きているのです。喜びたいから生きているのです。「ああ、おれ、生きてよかったなあ。なんてすばらしいんだ」という一日がもし今日であつたら、一生はこの今日のた

めにあつたと言えるほどのものです。人生というのは、生まれてから死ぬまで、もともと苦しみ連続なんです。だけどその中で、我々は必死になつて幸せを求めて生きています。人生とは、求めても求めても得られない幸せの青い鳥、それを追いかけている時間なのだと思います。聖書は、ユダヤ人が何千年もかけて人間の幸せとはいったい何なんだろうかということを考え続けて、そしていろいろな時代に、いろいろな人々があつたことと書き綴つたものをまとめた本です。そのユダヤ人の中から、今から二〇〇〇年ぐらい前に一人の百姓大工が現れました。イスラエルの国の北のほう、日本で言えば東北地方ですね。彼は田舎の村の百姓をやりながら大工をしていました。その名を「イエホシュア」といいました。これは当時の彼らの言葉ヘブライ語の標準語での発音です。だ

けどご存じのように、東北の人間が訛っているように、ガリラヤの人もひどく訛っていました。だからエルサレムあたりでは、ガリラヤ者に聖歌を歌わせてはいけない、聖書の朗読をさせてはいけないという決まりがあつ

たそうです。ガリラヤ人は「イエホシュア」という大変立派な名前を発音できず、「イエシユ」と言つていたのでそうです。だからこの男の本名は「イエシユ」なんです。これが「イエス」という名前の起りなのです。このイエシユという人が、人間の幸せというのはこうなんだというのを、一生懸命になつて話しました。そうしたら人々が、いかにもその通りだ、お前いいことを言うといつてそのイエシユ殿にみんなくつついて歩くようになったのです。この男はなかなか魅力的で豪快な人物だったようで、たくさんの仲間ができました。そしてその当時のユダヤの社会の常識を片っ端から踏みじつて、「そんなもの馬鹿馬鹿しい、やめろ、人間の幸せにはそんなものは必要ないんだ」と言つて歩いたものから、とうとう畳の上で死ぬなくて、殺されてしまうのです。

三・ケセン語訳聖書

ところが、私たち気仙衆が日

本語に訳された今の聖書を読んだって何を書いているのか訳がわからないことが多いです。私は子どもの頃から、これではだめだ、聖書を気仙の言葉に翻訳して、自分の友人たちのわかる言葉にしないと、ヤソ様の魅力は伝わらない、とずっと思っていました。三五歳の時に、故郷のおじさんと久しぶりに酒を飲んだのをきっかけに、そうだと俺は気仙の言葉にイエス様の福音書を訳して、そして友達にこれを伝えなくてはいけないと決意しました。子どもの頃から持っていた夢を果たすために、まずケセン式ローマ字、文法、アクセントの法則についても考えました。そういうことをちゃんと考えていたら、結局二五年かかりました。

ケセンの言葉は、ケセン方言とか、ズーズー弁だとバカにされて、悔しいので、ケセン語という名前にしたのです。ケセン語の文法書をつくり、教科書をつくり、『ケセン語大辞典』という大きな字引をつくり、そしてこれでやっと気仙の言葉で故郷の仲間にも福音書を書いて伝えることができるペンが手に入ったと思つたわけです。

四. 心の貧しい人は幸いである。

ただ聖書の言葉をケセン語に置き換えればいいというわけではなく、一つ一つの言葉の意味を深く考えて訳していかなければなりません。そうすると、非常に聖書が面白くなったのです。聖書には「心の貧しい人は幸いである」と書いてあるけれど、私はどうも、がてんがいかない。心の豊かなほうがいいに決まっている。日本語では、心の貧しい人とは、自分のことしか考えないガリガリ亡者で、趣味低劣、品性下劣、そういう自己中心的な人間のことをいい、軽蔑するわけです。これが日本語の感覚です。その、心の貧しい人は幸いだというのです。

では、「幸い」というのはどういう意味でしょう。聖書に「幸い」という言葉がやたらと出てきますが、「幸い」は「幸せ」とどう違うのかということを考えました。この違いを考えてみようと思つて、インターネット検索で「幸い」を検索したのです。そうするとそのはじめの一〇〇のうちの一は、「心の貧しい人は幸いである」についての牧師の説教だったのです。後の四九は、

一般人の書いた「もっつけの幸い」という言葉でした。つまり自分にとって都合がよければそれでいい。相手の不都合などはどうでもいい。全然関係ない。相手がそのためにどんなにひどい目に遭おうが、俺の知ったことか。これはもっつけの幸いだ、というときに「幸い」を使うのです。大方の日本人は「幸い」というのは「もっつけの幸い」という意味で使っています。

では「幸せ」はどうだろうか。インターネット検索の最初の一〇〇を見てみると面白いことがわかりました。日本語で「幸せ」というのは、人と人との交わりの中でお互いを完全に受け入れあつたときに感じる喜びのことをいうのです。それは、日本語訳聖書の中にやたらと出てくる「幸い」とは違う意味ではないかと私は思います。

「心の貧しい人」というのは、ではどういう意味なのか。これはやはりギリシャ語から考えなければいけない。ギリシャ語では「プネウマ(息)においてプトーホイナ(フニヤフニヤと弱くなっている)人」のことをいうのです。つまり鼻息の弱い人のことです。要するに金もない、体も

弱い、何も無い。つまり頼りなく、望みなく、心細い人のことなのです。私はそう訳しました。そういう人は幸せなんだよということ。幸いではなく「幸せ」なんだよと。なぜ幸せなのでしょう。天国は彼らのものかどうか。天国は彼らのものかどうか。天国は彼らのものかどうか。

五. 天国は彼らのものだ。

この「天の国」にも私は文句があるのです。天の国は、神の国とも言われます。国という日本語は一定の位置と面積を持つた国土のことをいいます。国には、常にある一定の位置と面積のある地面、動かない地面が必要なのです。

ところが、ルカの福音書には次の様に書かれています。ある人がイエスに「お前さん、神の国ということをしよつちゅう言うけれども、それはいつたいいつ来るんだ」というと、イエスは、「それはここにある、あそこにあるというものではない」と答えたわけ。場所と関係がないというのです。「それはお前さんたち一人ひとりの間にある」というのです。つまり人間関係の中にあると言ったのです。これ

は国ではないでしょう。それは「神様のお取り仕切り」と訳すべきたと私は思うのです。「人間が本当に幸せになるにはこういうふうにしたらいんだよと、神様が一生懸命教えてくださっている。その神様のお取り仕切り身を委ねようではないか。それによって、われわれは本当に幸せになれるんだ」と言っているわけ。神様のお取り仕切りは、俺たちの間にすでにあるではないか。それを拒否するな。そしてそれに身も心も委ねようではないか。そうするとわれわれは本当に幸せになるのだ」と言っているのです。

六. 心細い人は幸せだ。神様の御取り仕切りは、この人たちのものだ。

ちのなものなんだ。

では、鼻息の弱い人はなぜ神様のお取り仕切りが一番近くて、神様の懐にしっかりと抱きしめられる幸せが一番近いのかということになります。この答を、私は津波の災害の中で見つけました。ありとあらゆるものが全部なくなってしまう。陸前高田は、町が完全に壊滅してしまいました。そして七万本も

の松があつた白砂青松の高田松原は海底深く沈んでしまいました。そしてその後、半年もの間、がれきの中から、腐った人間の死体の、鼻がまがるような臭いがあつた世界を覆っていたのです。そしてみんな虚ろな目をして、幽霊のようにさまよい歩いていました。あの寒いところ。その時にわれわれは本当に頼りなく、望みなく、心細い人であつたのです。

実は、阪神淡路大震災の三週間前に三陸はるか沖地震というのがありました。そして東北方、北海道の太平洋沿岸に津波警報が出て、われわれは、寒い中、高台に逃げろというので、逃げ惑っていたのですが、幸い津波は来なかつたのです。お正月になつて、お屠蘇を楽しんでいたら、私のところに大阪のNHKに勤めている友人から電話があり、「この前の三陸はるか沖地震の時に、大阪、神戸あたりから、一晩に一〇〇〇本以上の抗議の電話が殺到し、『俺たちのところには津波も地震もない。東北地方に津波が来るといつたって、俺たちに何の関係があるのか。何にも関係がない。その何も関係のないところの津

波など、どうでもいい。観たテレビがいつぱいあるのに、その楽しみをなぜ関係のないわれわれから奪うんだ」と苦情を述べ立てた」と言うのです。それから三週間、阪神淡路大震災が起きたのです。あの時、神戸に真っ先に駆け付けた医療支援隊は岩手県医師会です。われわれは災害に慣れていまずから、真っ先に駆けつけました。

そして、一昨年の三月一日の地震の直後の日曜日に、教会に向かう途中通りかかった高台の広場に大型バスが四台ぐらい次々とやってきて、そこから警官隊がバーツと駆け足で降りてきたのを見ました。どこから来たのだろうと見たら、バスの横腹に大阪府警と書いてありました。私はあの時、本当に拝みました。あの時ほど嬉しかったことはなかったです。私はその時に大阪の人たちはわかってくれたんだなと思いました。東北の人間というの、自分の辛さではあまり泣かないのですが、人から助けられたときのありがたさはこらえることができない。それから、世界中の人がやっ

てきました。そして一生懸命溝さらいをしたりなんかしてくれました。それを見た近所の人たちが、言葉も通じないアメリカ人の青年たちに、お煮しめを持って来る。何も持つてくることができないばあさんが杖をついてやってきて、なんまんだ、なんまんだ…と泣きながら拜んでいるんです。

私、その時に「頼りなく、望みなく、心細い人は幸せだ。神様の御取り仕切りは、この人たちのものだ。神様の懐にしっかりと抱きしめられるのはこの人たちなのだ」というイエスの言葉が、我が身に沁みてわかった。人というものは、そうやって人と人が助け合うときに、相手がどうであろが、誰であろが、とにかく一生懸命になつて大事にしてみらつたときにこのすばらしい幸せをいただく。私の人生の中で本当に素晴らしい感動を味わう。これが「心の貧しい人」と訳された、わけのわからない言葉の、本当の意味だつたんだなということを感じた次第です。

七. お互いに大事にしあう。

アダムとエワの話をご存じだと思います。神様が楽園でアダムとエワに、この木の実だけは食うなよ、食うと死ぬぞと言われた木の実の名前は、「善悪の知識の木」と言われています。もつと平たく言えば「良し悪しを知る木」という意味です。どうして良し悪しを知る木の実を食べると死ぬのでしょうか。これはユダヤ人たちが、人間の不幸はどこからくるかということを生懸命になつて考えた末の一つの解答、そしてわれわれに對する問題提起であつたのだらうと思います。ですから、旧約聖書が一番最初にあの話を書いてあります。良し悪しを知る、「知る」というのはもう一つの意味があることを思い出してください。「支配する」という意味なのです。県知事の「知事」の「知」は支配するという意味です。「良し悪しを知る木」というのは、何が良いか何が悪いかということを支配するということです。

そしてこの木の実を食べれば、神様と同じになるぞと蛇が言いました。神様と同じように、こ

れはいいことだとその人が言えたいことなのです。これは悪いと判断は、神の如き権威を自分が持つているから正しいのだということになる訳です。そしてこれが人間を死に追いやったのです。人間というものは、みんな正しいことをしようと思つてしまつて、わざと悪いことをしようと思つてする人はあまりいない。みんないいことをしようと思つていてるのです。その、「何が良いか何が悪いか」という判断は俺様がするんだ。お前のすることではない。お前の言っていることは違う。俺のほうが正しいんだ。なにしろ俺は神様の如き善悪の知識を持っているのだから」という態度を曲げようとしなさい。そしてその結果はどうでしょう。人間は自分の判断によつて、「これは絶対に正しい」と信じることに徹底的に誠実であろうとすると、必ず破滅に陥ることになるのでした。ありとあらゆる戦さは正義の旗印のもとに行われました。そして血みどろの醜い争い。「一体どうしたらいいのですか、神様！」これがユダヤ人たちが何百年もの間、彼らの悲惨な歴史

の中で、本当に血を吐くような思いで求め続けた、叫び続けた神様への問いかけなのだと思います。

それに対してイエスが答えた言葉は、「たった一つの掟をお前たちに与えよう。それは互いに相手を愛することだ」というものでした。「愛する」という感情的な言葉は私は嫌いなので、「大事にする」と訳しました。互いに相手を大事にする。これは感情とは関係がないのです。愛さなくてもいい。嫌いでかまわない。だけど「互いに相手を徹底的に大事にしなさい。そうするとそこに何が正しいとか何が悪いとかという次元を超えた、本当の人と人の交わりが生まれ、人間の幸せがでるのだ」とイエスは口が酸っぱくして言っています。イエスの一番最初のお説教が「頼りなく、望みなく、心細い人は幸せだ」という言葉であり、最後の説教が「たった一つの掟は、お互いに大事にしなさい」ということだ。この二つの言葉が始めと終わりまで対になって、人間の幸せというものが何なのかということを我々に知らせてくれると思っております。

■ プロジェクト報告

■ ミナト神戸に宗教多元主義を探る

センター長 神田 健次

キリスト教平和学研究の新たな展開として推進されてきた共同研究のプロジェクト「ミナト神戸に宗教的多元主義を探る」へのシルクロードVの文化と宗教的共生」も、今年度で最終年度を迎えた。まず五月十日の第一回研究会において賀川記念館の西義人氏を講師として「賀川豊彦と神戸の街」という講演をしていただいた。また六月一四日に開催された第二回研究会では、生田神社宮司の加藤隆久氏に「地域に生きる神社を求めて」という講演を、そして七月一二日の第三回研究会では、本願寺神戸別院（モダン寺）僧侶の尾井秀瑛氏に「港町神戸に伝わるお念仏」と題して講演していただいた。さらに七月五日には、開港以来さまざまな貢献をしてこられた外国人の方々が、それぞれの多様な宗教に即して

埋葬されている神戸外国人墓地のフィールドワークを行った。三年間に及ぶ共同研究の成果は、この三月に神戸新聞総合出版センターより『ミナト神戸の宗教とコミュニティ』というタイトルで出版された。本書の特色は、これまでのミナト神戸の歴史や文化について論じられてきた数多くの著作には見られない宗教とコミュニティという観点からアプローチを試み、新たなミナト神戸の姿を提示しようとした点にある。そのような観点から一〇回にも及ぶフィールド・スタディーを実施して、それぞれの宗教の実際の姿、地域におけるその働きに学んできた。特に重点的に訪れた中央区という小さな地域において多様な宗教とコミュニティが平和的に共存している姿は、9・11以降のグローバルな状況

の中で重要な意義をもっているであろう。

本書のもうひとつの特色は、ミナト神戸における宗教とコミュニティの姿をいきいきと描写したいということで、それぞれの宗教で指導的な役割を担っておられる方、あるいはそれぞれの宗教共同体に深く関わっておられる方の貴重な体験的証言を、ふんだんに本書に盛り込んでいるという点にある。そして、そのような各宗教の当事者の生きた証言を中心にすえて、各執筆者がそれぞれの宗教の歴史や状況について補充的に論述するというスタイルをとり、それぞれの宗教の歴史と特質、宗教共同体における相互の結びつき、地域社会における宗教の役割、特に阪神・淡路大震災における宗教の役割等について叙述されている。この研究成果を、来年度の学内総合コースにおいて還元する予定である。

■ 自然の問題と聖典

センター副長 樋口 進

この研究プロジェクトは、二〇一一年度から始められ、今年度二年目である。二〇一二年度の秋学期に行われた研究会は、以下のとおりである。

第四回研究会は、二〇一二一年一月三十一日（水）午後五時より六時三〇分に行われ、一人名が参加した。「イエスの自然観——イエス伝承における自然と神の国」というテーマで、嶺重淑人間福祉学部教授が研究発表された。ここにおいて、まず「旧約の自然観」を概観したのちに、福音書の「思い煩うな」（マタイ六・二五―三三、ルカ二・二二―三三）、「成長の譬え」（マルコ四・二六―二九）、「からし種の譬え」（マルコ四・三一―三二）をテキストとして取り上げ、その伝承と編集を明らかにし、中心的主題について論じられた。次に、イエスの奇跡伝承が取り上げられ、「突風鎮圧」（マルコ四・三三―四一）、「いちじくの木の呪

い」（マルコ一・二二―二四、二〇一―二五）、「実らないいちじくの木の譬え」（ルカ一三・六―九）において、伝承と編集を明らかにし、中心主題が論じられた。次に終末のしるしのテキストとして、「終末のしるし」（マルコ一三・三一―三六）と「人の子の到来」（マルコ一三・二四―二五）のテキストを取り上げ、やはり、伝承と編集を明らかにし、中心的主題が論じられた。それぞれのテキストにおいて自然がどう捉えられているかが論じられたが、総じてイエスは自然を比喻として肯定的に用いているが、伝承では否定的に用いられていることが述べられた。

第五回研究会は、ミニフォーラムとして、二〇一二一年一月三〇日（金）午後五時より六時三〇分に行われ、六名参加した。「自然・環境問題と佛教」というテーマで、真言宗御室派法園寺副住職でNCC宗教研究所研究員の松田 史氏に研究発表していただいた。ここでは、宗教一般



キリスト教の自然観に触れられた後に、佛教の経典（特に『像跡論大経』「しよせきゆだいきょう」）における自然観について述べられ、近代主義の見直しが提起された。そして、現代社会の土地の自然と共に生きていか

の傲りを批判し、佛教的視点からの自然環境問題の解決として

「少欲知足（欲を少なくして満足することを知らぬ）」が提起された。また、東日本大震災被災者の「こ

■キリスト教主義教育の展開

センター副長 山本 俊正

キリスト教主義教育研究プロジェクトは二〇一一年度に発足し、今年度で二年目を迎えた。FDの一環として実施した宗教主事による、キリスト教及びチャペルの実施報告研究会を昨年引き続き実施した。今年度は、二〇一二年七月六日（金）に、「関西学院大学におけるキリスト教の現状と課題」と題して平林孝裕研究員（大学宗教主事・国際学部宗教主事）より発題がなされ、キリスト教主義教育の実践の現状と参加者との情報交換による課題の共有がなされた。なお、この実践報告の研究会は秋学期より大学宗教主事会のFD部に主管を移し、関西学院の基層を担うキリスト教主義教

なければならぬ」という言葉に共感を示された。

いずれの研究会も、発題の後、活発な質疑・応答、議論が行われた。

育について、神学部との連携を含め、実施されることとなった。また、「本学のキリスト教主義教育の内実化を図る」ことを意図して、スタートした本研究プロジェクトは、関西学院大学のキリスト教主義（教育）がどうあるべきなのか、またどのように展開されるべきなのかを模索し、検証し、具体的な提案を広く共有化するためのミニフォーラム研究会を開催した。今年度は昨年に引き続き、RCCの初期からの歩みに焦点を当て議論を共有した。講師として元商学部宗教学主事で現在、広島大学大学院総合科学研究科教授（宗教学、新約聖書学）の辻 学氏を招き、「キリスト教と文化は衝突したか

—RCCの歩みと関学のキリスト教主義教育—を主題に講演していただいた。また、来年度の本研究プロジェクトの計画として、キリスト教主義教育を實踐している他大学との交流、連携により、「キリスト教主義教育」に関連するシンポジウムの開催が構想されている。このシンポジウム開催の実現可能性を含め、二〇一三年二月二〇日（二）日まで、名古屋にある金城学院大学キリスト教センター及び名古屋学院大学を訪問し、キリスト教主義教育に関する聞き取り、意見交換を内容とするフィールドスタディを実施した。来年度の研究活動に活かしたい。

■本年度RCC紀要を発行
本研究センター紀要『関西学院大学キリスト教と文化研究』第一四号が三月三十一日、刊行された。内容は以下の通り。

【論文】

「第二イザヤの預言者像」
樋口進（RCC教授・宗教センター宗教主事）

「イエスのカファルナウム宣教」
ルカ4:31-44の文脈と機能」
嶺重淑（人間福祉学部教授・宗教主事）

「キリスト者とユダヤ人の関係刷新とは何の謂か—シヨアー以後のキリスト教神学構築の試み—（その二）」
畠山保男（RCC教授）

「草創期エキュメニカル運動における宣教の神学—諸宗教との関わりにおける宣教理解に注目して—」
村瀬義史（総合政策学部専任講師・宗教主事）

「チュニジア民主化革命—現在までの歩み—」
オムリブージッド（RCC研究員）

【研究ノート】

「Rethinking the Relationship between Christianity and Colonialism: Nanyo Dendo Dan, the Japanese Christian Mission to Micronesia from 1920 to 1942」
Eun Ja Lee
（国際学部准教授・宣教師）

「研究プロジェクト報告」
「ミナト神戸に宗教多元主義を探る—『海のシルクロード』の文化と宗教的共生」
神田健次（神学部教授）

「自然の問題と聖典」
樋口進（RCC教授・宗教センター宗教主事）

「関西学院大学におけるキリスト教主義教育の展開」
山本俊正（商学部教授・宗教主事）

編集後記



東日本大震災から二年が経ちました。悲しいかな多くのものを失いました。山浦氏の講演を伺いながら、聖書の「エツサイの株からひとつの芽が萌えいで」（イザヤ11:1）という言葉を思い起こしました。

切り株から新しい命の象徴である「ひとつの芽」が萌えいでるように絶望の中から一つの希望が始まるという言葉です。災害の悲惨さは簡単に忘れられるものではありませんが、そこから萌えいでた葉にも目を向け、それを大切に育てていきたいものです。
(M)

